大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 馬王堆の胎産書・禹蔵圖・人字圖について



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2011-10-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 大形, 徹<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004442 |

# 馬王堆の胎産書・禹蔵圖・人字圖について

大形　徹

## はじめに

馬王堆出土の書籍の中で、妊娠・出産に関する帛書は、『胎産書』と名づけられている。本来、書名はなく馬王堆漢墓帛書整理小組（以下、整理小組と略称）が命名したものである。拙稿では、この書および同じ帛の中に描かれる禹蔵圖、人字圖について考察する。

馬繼興『出土亡佚古医籍研究』、は、これらの書物を『漢書』藝文志、方伎類にあわせて分類することを試みている。

3「房中」類文献共5種、即、

《養生方》—馬王堆出土
《雑療方》—馬王堆出土
《天下至道談》—馬王堆出土
《十問》—馬王堆出土
《合陰陽》—馬王堆出土

4「神仙」類文献共8種、即、

《却谷食氣》—馬王堆出土
《導引圖》—馬王堆出土
《胎産書》—馬王堆出土
《雑禁方》—馬王堆出土
《導引九法》—張家山出土
《導引三十二法》—張家山出土
《四十八病導引》—張家山出土
《導引之效》—張家山出土

『天下至道談』『十問』『合陰陽』が「房中」類に入るのは問題ないだろう。『養生方』と『雑療方』も房中とされている。『雑療方』という名は房中術の書にそぐわないが、雑多な内容が含まれており、

房中とも多少、関連する。

『胎産書』が『雑禁方』とともに「神仙」類に分類されているのは疑問である。『胎産書』に類似した内容は北斉、徐之才の『逐月養胎方[2]』や『産經[3]』にみえる。『産經』は、『通志』藝文略で産乳に分類されている。『漢書』藝文志には、そのような分類がない。『漢書』藝文志編纂時に、『胎産書』の類の書物は必ず存在していたはずであるが、藝文志に著録されていない。これは、当時、取捨選択が行われ、俗書として価値のないものとみなされていたのかもしれない。

馬繼興氏が馬王堆出土の書物を芸文志という鋳型に流し込んだことは価値のある仕事である。けれども著録されなかった理由を考察してみる必要もあるだろう。

## 一、『胎産書』の文章

### 書名

『天下至道談』は、竹簡中に「天下至道談」と記したものがあり、本来の書名といってもよいだろう。『胎産書』という書名は馬王堆帛書整理小組が命名したものだが、「胎産書」という文字は帛の中に全く登場しない。現在、『胎産書』として知られているため、拙稿でも、その名称にしたがう。けれども、後に考察するように、「南方禹蔵」という四文字が帛の図の中心に大書されており、これが帛全体の書名であった可能性もあるだろう。

『胎産書』は、胎児の成長、胎教、胞衣の処理などに関することが記された帛書である。同じ帛の中に図二種も描かれていた。これらの図も整理小組により、『人字圖』・『禹蔵圖』と命名されている。後図の名称は図の中心部に大きく「南方禹蔵」と墨書されていたことと、『雑療方』の原文二十四に「禹臧（蔵）貍（埋）包（胞）圖法」とみえることによる。これは「禹蔵埋胞圖法（禹が胞を蔵埋する圖法）」と読むことができ、それを縮めると「禹蔵圖」になる。

後世の同種の書物には、『産經』や『逐月養胎方』があり、内容も類似する。『産經』の「産」と『逐月養胎方』の「胎」をあわせたようにもみえるが、宋の陳振孫の『直斎書録解題』に陸子正撰『胎産經方』一巻が記され、宋、王衮撰『博済方』巻四の最初の見出しが「胎産」である。また日用類書の『三台萬用正宗』に「胎産門」という語がみえる。整理小組は「逐月養胎方の祖本」と述べている。

### 内容

鈴木千春氏は、「馬王堆出土の『胎産書』には、胎児の発育記述や妊婦の養生法などの論説が妊娠の各月ごとに記されている。それ

らの根拠と論理背景を考察した結果、本書の胎児発育記述の一部分は、流産などによる実際の胎児観察に基づく可能性が強く示唆された。ほぼ同時代の胎児発育記述は『管子』『淮南子』にも存在するが、『胎産書』とは相当に異なり、実際の観察に基づくとは考えられなかった。『胎産書』の発育記述は世界でも現存最古に属する胎児観察記録と推量される[4]」と述べている[5]。実際の胎児を観察しているようにみえるという。

## 出土状況と形式

小曽戸洋氏は、『五十二病方』等の復元にあたり、「多くの帛片には、重なりあっていた相手の帛の字の墨が鏡文字として写っている。これを徹底的に調査し、解析すればこの書の形態がわかるのではないか」・「馬王堆帛書の新知見によって、冊子本ははるか昔の戦国時代に存在したことが明らかとなり、従来の定説は覆った。このことは書誌学上、画期的な発見といえるであろう[6]」と述べている。

「これら五種の医書はもと巻末折込みに示すような二枚の帛書に書かれていたものである。帛の大きさは第一帛、第二帛とも、それぞれ縦約四八センチメートル、横約一一〇センチメートル。それぞれ横半分に二つ折り、縦を八つ折りにし、各一六頁、計三二頁である。帛には片面に文字が書かれている。埋蔵時は二枚の帛の文字が書かれていない側を背中合わせにし（第1頁の裏に第32頁の裏を合わせ、第9頁の裏に第24頁の裏が合わさる）、これが第一帛は内折りに、第二帛は外折りの状態で、埋葬時ちょっとしたきっかけで、やや変則的に畳んであった[7]」とみえる。

『胎産書』の場合も状況は似ている。帛は縦約四九センチメートル、横約四九センチメートル[8]と記されているが、写真版をみると正方形ではなく、縦長である。まず文字の書かれている側を内側にして上下に折り畳まれていたようである。そのことは帛の下半分に書かれていた文字が上半分に鏡文字として転写されていたことからわかる。けれども出土した状態では、さらに左右を重ねるように横にも折り畳まれていたようだ。そのため、開いた状態では、ちょうど四つに分割されたようにみえ、真柳誠氏も「全体は大きく四裂片に分かれ[9]」と述べている。けれども写真をよくみれば、さらに細かく折られていた折り皺の痕跡がみえる。簡単にいえば、四分の一の大きさになるように折ったあと、もう一度、横に折ったようにみえる。この時点で縦長の書状のような形になり、携帯して持ち歩くのに適している。『醫心方』には男性が自らの子の胞衣を埋蔵する場所を探すことが記されているが、被葬者の男性が、かつて自らの子の胞衣を埋蔵する場所を探すためのハンドブックとして持ち歩いたのだろう。子は一人だけとは考えにくいので、何度も使用された可能性

が強い。ただし、副葬時には、小さく折り畳む必要もないため、せいぜい、上下左右にしか折っていないように思われる。

整理小組は、この折り畳まれていた「帛」を『胎産書』一巻と記述している。けれども、厳密にいえば巻物ではないため、「巻」と呼ぶことは、たとえ量詞としての「巻」であっても、ふさわしくない。馬繼興氏は前掲『出土亡佚古医籍研究』において「帛」と呼び、「巻」とはしていない。

現在、絹地に文字を書し、あるいは絵画を描いたりして、それを巻物の形にする場合には、絹を和紙などで裏打ちする必要がある。絹そのままだと軟らかすぎ、しっかりと巻くことは難しいのだろう。ただし、馬王堆の「帛」の写真を見れば、織りはそれほど細かくはなく硬そうである。

竹簡や木簡を巻く形が後世の「巻子本」の原型になる。書物を巻と数えることもそこに由来している。けれども、帛を巻くことは、芯になる木などを入れない限り、うまくゆかず、折り畳まれることも多かったようだ。

『胎産書』も『五十二病方』も折られていたことにより、墨文字が合わさった面に付着し、鏡文字として転写されていた。そのため、帛がボロボロになり、文字が読めない部分も、鏡文字を反転させて当該箇所に嵌め込むことで、ある程度、読めるようになる。実際、整理小組は、そのようにして、かなりの部分を判読しているのである。

折り畳まれていた帛を開いて広げると、まず「南方禹蔵（図版参照）」と墨書された太い文字がみえ、そのまわりに、月と方位をあわせた図と数字が記されているのがみえる。図は朱で描かれている。別に「人字圖」とよばれる図と簡単な文が右の上半分部分にみえる。下半分には、妊娠と胎教にかかわる月ごとの文章や胞衣処理の文章が記されている。文章の最初には、「・」（日本でいうナカグロによく似た「点」）が付けられている。この「・」は文章のまとまりを示しており、全部で19つけられている。そのうち一つを除き、すべて上部につけられている。『胎産書釋文註釋[10]』は、この「点」をすべて記しているが、馬繼興氏の『馬王堆古醫書考釋』は、すべて省略している。

## 儒教書にみえる胎教

胎教の記述としては、孟子に関するものがある。孟子の母は、孟母三遷や孟母断機の話で有名であるが、『韓詩外傳』巻九に以下のような話がみえる。

孟子が幼い時に、東となりの家が豚を殺した。孟子はその母に

たずねて言った。

「どうして、東の家が豚を殺しているの」と。

母はこう答えた。

「おまえに食べさせてやろうと思ってるからだよ」と。

言ってから母は後悔してこうつぶやいた。

「わたしが、この子を身ごもったとき、席が正しくなければ坐らず、包丁の切り目が正しくなければ食べなかった。胎（お腹の子）に、それを教えたのである。今、この子に知恵がつくころに、騙すようなことをすれば、この子に不信感を植えつけることになる」と。

そこで、東の家の豚肉を買って、子に食べさせ、嘘ではないことを明らかにしたのである。

「胎（お腹の子）に、それを教えたのである」と訳した部分は、原文では「胎教之也（胎に之れを教うるなり）」と記され、「胎教」という言葉の典拠の一つとされている。何を教えたのかといえば、「席正しからざれば坐せず。割正しからざれば食らわず」とある。これは『論語』郷党篇の孔子の語である。日常生活に関わる細々した礼であるが、それらをきちんと行うことが、お腹の子の教育によいと考えられたのであろう。

前漢、戴徳撰『大戴禮記』保傅にも、「胎教」の語がみえる。

周の后妃が成王を任（みごも）った時、立っても跂（つまだ）ず、坐っても足をくずさず、獨りでいても倨（うずくま）らず、怒っても詈（ののしら）なかった。胎教の意味である。

ここでは「胎教の謂なり（胎教之謂）」と「胎教」という語が熟語化している。

続けて以下のようにいう。

太任が文王を孕んだ時、目には悪い色を視ず、耳には淫らな音を聴かず、口には悪い言葉を話さなかった。そこで、君子は、太任はよく胎教を行った、と思った。古は、婦人が妊娠した時の礼は、「寝る時は横向きにならない。坐る時は辺（かたよ）らない。立つ時は蹕（もた）れない。邪味を食べない。包丁の切り目が正しくなければ食べない。席が正しくなければ坐らない。目は邪悪な色を視ない。耳は淫らな音を聴かない。盲目の楽師に詩を誦させ、正しい事を道（い）わせる」というものであった。このようにすれば、生まれる子の姿形は端正で、才能は人よりも優れたものになる。子を孕んだ時には、必ず感じる所に気をつけねばならない。善

に感じれば善になり、悪に感じれば悪になるのである、と。

ここでも「胎教」という語がみえる。太任の話は前漢、劉向（七九～八B.C.）の編とされる『古列女傳』周室三母の中にも見え、やはり「胎教」の語が使われている。

まとまった記述としては、前漢の賈誼（二〇〇～一六八B.C.）の『新書』胎教がある。そこには、「青史氏之記曰、古者胎教之道…」と見え、「青史氏之記」に胎教のことが記されていたとわかる。この「青史氏之記」というのは、さきの『大戴禮記』保傅にも見えたが、芸文志の『青史子』五十七篇のことではないかと思われる。

以上、述べた胎教の話は、いずれも大きくは儒教の枠組みの中にある。儒教的な道徳教育を妊娠中からすでに行わねばならないという考え方である。問題は、それらの胎教に関する記述と『胎産書』の記述に全く重複するところがないということである。つまり、『胎産書』は儒教的教養とは一線を画した書物であったといえる。

『胎産書』は、むしろ、『備急千金要方』巻二所引、徐之才『逐月養胎方』、『諸病源候論』巻四十一、妊娠候、『醫心方』巻二十二所引『産經』などの医書の記述と重複するところがある。それらの書物は、『胎産書』を祖形として、あるいは針灸、あるいは湯薬の要素を、雪だるまのように付加していき、増大していったように思われる。

**逐月養胎方**

徐之才は北斉の人だが、梁に仕え、のち魏の尚書令となっている。『逐月養胎方』は、いくつかの書物の集合体となっている。妊娠一ヶ月の箇所でいえば、まず『胎産書』によく似た一説が引かれ、次に経絡や針灸と関わる記述があり、さらに病気になった場合のことが記され、続けて服用する薬物の処方が記載されている。ここでは『胎産書』に類似する部分のみ、取り出してみた。

妊娠一月名始胚飲食精熟酸美受御宜食大麥毋食腥辛是謂才正

妊娠二月名始膏無食辛臊居必靜處男子勿勞百節皆痛是為胎始結

妊娠三月名始胎當此之時未有定儀見物而化欲生男者操弓矢欲生女者弄珠璣欲子美好數視璧玉欲子賢良端坐清虛是謂外象而内感者也

妊娠四月始受水精以成血脉食宜稻粳羹宜魚雁是謂盛血氣以通耳目而行經絡

妊娠五月始受火精以成其氣臥必晏起沐浴浣衣深其居處厚其衣服朝吸天光以避寒殃其食稻麥其羹牛羊和以茱萸調以五味是謂養氣以定五臟

妊娠六月始受金精以成其筋身欲微勞無得靜處出遊于野數觀走犬及視走馬食宜鸜鳥猛獸之肉

妊娠七月始受木精以成其骨勞身揺肢無使定止動作屈伸以運血氣居處必燥飲食避寒常食稻粳以密腠理是謂養骨而堅齒

妊娠八月始受土精以成膚革和心静息無使氣極是謂密腠理而光澤顔色

妊娠九月始受石精以成皮毛六腑百節莫不畢備飲醴食甘緩帶自持而待之是謂養毛髮致才力

妊娠十月五臟俱備六腑齊通納天地氣于丹田故使關節人神皆備但俟時而生

妊娠一月始胎二月始膏三月始胞四月形體成五月能動六月筋骨立七月毛髮生八月臟腑具九月穀氣入胃十月諸神備日滿即産矣宜服滑胎藥八月即服

最後の一節は全体のまとめだが、『醫心方』所引の『産經』では最初の部分に相当する。『醫心方』には図がある。

**狭義の胎**

「胎」の文字には妊娠三ヶ月目の胎児を特に指し示す場合がある。『説文解字』胎に「婦孕みて三月なり[11]」とあり、確かにその例が最も多い。だが、「図表一、胎」にまとめたように、「逐月養胎方」の二では一ヶ月目を「胎」といい、『産經』では二ヶ月目を「胎」ということがあり、『文子』や『醫心方』所引の『太素』では四ヶ月目を「胎」という。「胎」は三ヶ月を中心として、一ヶ月、二ヶ月目、四ヶ月目をも含めての胎児をいうと考えてよいだろう。

また、たんに「胎」という場合は、母親の体内にいる状態を「胎」と述べる事が多いようである。現在の我々と同様である。たとえば『醫心方』巻二十二では、治任婦養胎方、治任婦胎動不安方、治任数落胎方、治任婦胎堕血不止方、治任婦堕胎腹痛方、治任婦胎上迫心方、治任婦胎死不出方、治任婦欲去胎方等が記されているが、いずれの場合も、とくに三ヶ月の胎児を指しているわけではない。（図表一、胎）

**始は胎では**

『胎産書』という書名は整理小組の命名であるが、この書物には「胎」という文字が全くでてこない。これは大きな疑問である。「胎」の文字自体は戦国時期の金文である「陳胎戈」の「陳胎之右棨戈[12]」に見える。また戦国中期とされる天星観楚墓竹簡T74[13]の写真にみえるが、江村治樹主編『馬王堆出土医書字形分類索引[14]』、陳松長編著『馬王堆簡帛文字編[15]』、李正光編『馬王堆漢墓帛書竹簡[16]』には見えない。馬王堆出土の書物の時代に「胎」の文字は、すでにあったはずだが、この文字が使用されていないのである。

**図表一、胎**

| | 『胎産書』 | 『管子』水地篇[18] | 『淮南子』精神訓[19] | 『説文解字[21]』 | 『文子[22]』 | 『諸病源候論[23]』姙娠候 | 同姙娠轉女為男候[24] | 『備急千金要方[25]』「逐月養胎方」の一 | 同「逐月養胎方」の二 | 『醫心方[26]』『産經』の一 | 同『産經』の二 | 同『醫心方』注所引『太素』 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1ヶ月 | 留刑（形）、（流形、留は胎とも[17]） | | 膏 | 胚 | 膏 | 始形 | | 始胚 | 始胎 | 胚 | 始形 | 膏 |
| 2ヶ月 | 始膏 | | 胅[20] | | 脉 | 始膏 | 始蔵 | 始膏 | 始膏 | 胎 | 始膏 | 脉 |
| 3ヶ月 | 始胎 | 如咀 | 胎 | 胎 | 胚 | 始胎 | 始胎 | 始胎 | 始胞 | 血脈 | 始胎 | 胞 |
| 4ヶ月 | 血 | | 肌 | | 胎 | 血脈 | | 血脈 | 形體成 | 骨 | | 胎 |

ここで「胎」に字形が似る「始」という文字に着目してみたい。『胎産書』の第一段落で判読できる二八二文字のうち、「始」は七箇所見え、剥落している箇所を推測で補ったものを含めると十箇所あまりある。

従来、「始」は「始めて」の意味で読まれている。『馬王堆古醫書考釋』でも馬継興氏は「開始」と現代語に訳している。けれども、「始」を「胎」の意味で使用していた可能性はないだろうか。「胎」には「はじめ[27]」の訓がある。これは『爾雅』釈詁の「胎…始也」にもとづくものである。晋、郭璞（二七六～三二四）の『爾雅』注は、「胚胎未だ成らず、亦た物の始めなり[28]」と述べている。この場合の「物」について、『爾雅』の疏は「物は則ち形なり[29]」と「形」ととらえている。「物の始め」を「人の形の始め」と理解すれば、わかりやすい。いずれにしても、「胎」は「はじめ」なのである。

高田忠周『古籀篇[30]』巻四十一の四は、「胎」の文字の原形として帰父盤の「ㄅ（台）」を挙げ、「…胎の字も亦た当に台を以て之れと為すべし。又た或いは始を以て之れと為す可し」と、「胎」は「台」や「始」に置き換えが可能だという。さらに、先に見た『爾雅』釈詁の「胎…、始なり」と、その注の「胚胎は、未だ成らず、物の始めなり」を引用した上で、「始、胎の二字、或いは轉注為り」という。転注とは『説文解字』で「同意相受く」とされている。「胎」に「始め」の意味があるとすれば、「始」にも「胎」の意味があってもよい。胎は「人の始め」である。「胎」は「にくづき」だが、むしろ、「女篇」の「始」の方が胎児をあらわす文字として、ふさわしいように思われる。

文脈の中で、「始」を「始めて」ではなく「胎児」と訳すことは可能だろうか。一例をあげてみよう。

『胎産書』の「二月始膏」の部分を馬繼興氏は「妊娠両個月的時候称為〈始膏〉。此時在胎児体内開始生長膏滋（妊娠二ヶ月の時を〈始膏〉という。この時、胎児の体内で膏滋が生長し始める）[31]」と訳している。馬氏は「始」を「開始」と訳しているにも関わらず、訳文に「胎児」を補なっている。

もし、「始」が「胎」の意味で使用されているならば、そのままで通じるのではないか。『胎産書』の「始」が「胎」の意味に読み替えられるとすれば、「乃始為人」は「乃ち始めて人と為る」ではなく「乃ち始（胎）、人と為る」と理解できる。「二月始膏」は「二月始（はじ）めて膏あり」ではなく、「二月始（胎）に膏あり」、「是胃（謂）始臧（藏）」は、「是れ始めて臧（藏）さると胃（謂）う」ではなく、「是れ始（胎）に臧（藏）さると胃（謂）う」、これは「胎蔵」である。「三月始脂」は「三月始めて脂あり」ではなく、「三月始（胎）に脂あり」と読むことができる。「胎蔵」という言葉は、仏教用語のイメージが強いが、本来は産科の用語で、宋陳直撰『親養老新書』にも「治妊娠養胎藏…」と使われている。

『胎産書』に数多くあらわれる「始」が「胎」の意味で使われているとすれば、わかりやすくなる。

## 『胎産書』と他の書物

『胎産書』と関連する書物として、『管子』水地篇、『淮南子』精神訓、『諸病源候論』、『逐月養胎方』（『千金要方』所収）、『産經』（『醫心方』所収）を並べてみた。『諸病源候論』、『逐月養胎方』、『産經』は『胎産書』の文章が、そのまま流れ込んでいるようなイメージがあり、影響関係が大きい。表では省略したが、他の要素も入り込んでいる。『管子』と『淮南子』は、文章はそれほど似ていないものの、胎児の発育を月ごとに捉えようとする考え方は同じである。またいずれも、「水」から始まっており、「水」を重視する傾向がある。『管子』水地篇は、水と地（土）のすばらしさを強調した篇である。「…水は、地の血氣、筋脈の通じ流るるが如き者なり[32]」。この表現は、人体を血管が走っている様子になぞらえているのだろう。また「人は水なり[33]」とは、何とも大胆な表現であるが、人と水との関係を説く時に、それほどまでに水が重要であるということがよくわかる。「男女、精氣合して水、形を流（し）く[34]」も、男性の精と女性の精が合わさって、鋳型に水を流し込むようにして形ができあがるということを述べている。男性ばかりでなく、女性にも「精」があることは、馬王堆の房中術書にもみえ、「精」が男性に限らないことがわかる[35]。

水を貴ぶことは、『老子』や郭店楚簡の『太一生水』にも見え、一種の流行ともいえるかも知れない。『老子』には、「上善は水の若し。

水善く萬物を利して爭そわず、衆人の悪む所に處る、故に道に幾し（第八章）[36]」、「天下、水より柔弱なるは莫し、而も堅強なる者を攻むるに之れに能く勝つ莫し、其の無を以て之れを易くす（第七八章）[37]」といった表現がみえる。これらは、いずれも、水がいかにすぐれているかを説く。その際、水の徳を人格になぞらえている。生成論としての水ではない。それに対して、『太一生水』は、太一という根源から生み出されるものが水だ、と述べており、物事の始まりを水に結びつけたものとして重要である。

『管子』の「人は水なり」と、それらとの関わりは不明だが、水地篇が「水」のことを強く意識していることは間違いないだろう。（**図表二、胎産書と他の書物との比較表**）

## 五行プラス一

『胎産書』では、4ヶ月から9ヶ月にかけて、それぞれ、水・火・金・木・土・石に対応している。五行よりも一つ数が多い。鈴木千春氏は、この並びが一般的な五行とは異なることを指摘しているが、ここでも確認しておきたい。

五行相生説は、木→火→土→金→水→木の順番で循環していく。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず、という形になる。ことは全く一致していない。一方、五行相克（勝）説は、水・火・金・木・土の順であり、水は火に克ち、火は金に克ち、金は木に克ち、木は土に克ち、土は水に克つ、という順序で循環する。5つ目までは、この相克説に合致する。ゆえに、この相克説に則っているといえる。けれども胎児の発育は、むしろ足し算の発想であり、胎児にとって必要な要素を加算していくという意味合いが強い。相克であることに意味があるとは思えない。また石を加えると、うまく循環しない。

中村禎里氏は、『書経』にみえる相生理論を持ち出し、『胎産書』の順序は、それが変形したものではないかと推論している。その推論は興味深いが穿ち過ぎのように思われる。

おそらく相克説の方が相生説よりも古い。斉の鄒衍が、はじめて五行のことを説いた時、相克説であったようだ。『史記』では、「始皇、終始五德の傳を推し、以為えらく周は火德を得、秦は周の德に代わるは、勝たざる所に從う。方今水德の始め……[38]」と秦の始皇帝が、いわゆる五德終始説を採用したという。

しかしながら、始皇は数は「六」を貴んだという。「六」は秦の聖数とされる。五行であって六を貴ぶというのは、うまく整合しないように思われるが、相克説の順序を借りた上で、それに一を加えて六にしたとすれば、それは可能である。胎児の成長の場合、必ずしも循環する五行である必要はなく、むしろ加算式である方が好ま

しい。相克説を持ち出すと、かえって矛盾する。相克も相生も加算式とは異なる原理であるが、五に石という一を足せば、結果的に加算式となり、循環しないのである。（**図表三、五行と身体**）

相関関係として、水と血、火と気、木と骨は納得しやすい。金と筋は発音の類似によるのだろう。土は、地表をおおうもので、それを膚革というのは理解できる。石と豪（毫）毛も、皮膚の上にある硬いものということで理解はできるが、細くて長いものというイメージには合致しておらず、これは付会に近いようである。

## 日用類書や三世相との類似

日用類書[39]と呼ばれている書物の中に『胎産書』と類似の表現がみえる。『萬用正宗不求人[40]』種子門、十月受胎圖訣、『五車拔錦[41]』保嬰門、十月胎形圖説、『三台萬用正宗[42]』胎産門、十月胎形、『萬書淵海[43]』婦人門、十月胎形圖説、『五車萬寶全書[44]』、種子門、十月受胎圖、『妙錦萬寶全書[45]』全嬰門、十月胎形圖説などに、それぞれ月ごとに十か月にわたり胎児の成長の図がつけられた上で解説がつけられる。「胎産門」という部門もある。

また江戸時代から明治にかけて日本で流行した三世相と呼ばれる書物がある。前世・現世・来世の三世の因果・吉凶を判断するという仏教的な書物であるが、大雑書とも呼ばれ、民間の生活に必要な雑多な知識が詰め込まれている。これは平成になってもまだ出版されている。たとえば『三世相安政雑書萬暦大成[46]』では、「懐胎十月の圖」が画かれるが、初月は不動明王、三月めは文殊菩薩というように、仏像と一緒に配置されている。『永代大雑書三世相[47]』の「懐妊十月圖解」では、四ヶ月までは密教法具の金剛杵等が画かれ、五ヶ月目より胎児の形が画かれる。十か月目は胎児の頭が下になっている。このすぐ後に、「胞衣納る方」が記され、「子年であれば、巳午または子の方角がよい」などと十二支に分けて記されている。別の箇所には、「四季皇帝の事」とあり、四季ごとに四名の皇帝の絵がえがかれ、頭、肩など身体の部分にそれぞれに十二支の名がえがかれている。これも胎児の出生と運勢を結びつけたものだが、後述するように人字圖と関連する。

三世相の類の書物は他にも多々あるが、それらにほぼ共通してみえる、胎児の成長の様子、出産後の胞衣の埋め方、四季により生まれた子の運勢を占うこと、のいずれもが、『胎産書』の記されていた帛の中に、すでに述べられている。これらの知識は、その基本的な形をかえることなく、連綿と伝わり、海を越えて日本の庶民にまで影響を与えている。

# 図表二、胎産書と他の書物との比較表[48]

| | | 1ヶ月 | 2ヶ月 | 3ヶ月 | 4ヶ月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 『胎産書』 | 禹問幼頻曰、我欲埴（殖）人産子、何如而有。幼頻合（答）曰、月朔已去汁□、三日中從之、有子。其一日南（男）、其二日女殹（也）。故人之産殹（也）、入於冥冥、出於冥冥、乃始爲人。 | 一月名曰留刑（形）、（流形、留は胎とも）。食飮必精、酸羹必（熟）、毋食辛星（腥）、是謂財貞 | 二月始膏、毋食辛臊、居處必静、男子勿勞、百節皆病、是胃（謂）始臧（藏）[49]。 | 三月始脂、果隋宵效、當是之時、未有定儀、見物而化、是故君公大人、毋使朱（侏）儒、不觀木（沐）候（猴）、不食窗（窗ー八）（葱）薑、不食兔羹。□欲産男、置弧矢、□雄雉、乘牡馬、觀牡虎。欲産女、佩蠶（簪）耳（珥）、呻（紳）朱（珠）子、是謂内象成子。 | （四月）而水受之、乃使[50]成血。其食稻麥、鱓魚□□、（以）清血而明目。 |
| 『管子』水地篇 | …水者，地之血氣，如筋脈之通流者也。…人水也。男女精氣合而水流形（流布也、水化而布形） | | | 三月如咀（如而也。咀含味也。胎三月。雖形未具、而含味母気以自養）咀者何、曰五味（問咀何、対曰、咀五味。五味者何曰、五藏（形未具、不能咀五味、故又問五味者何、対曰、即母五藏之気也）、酸主脾、鹹主肺、辛主腎、苦主肝、甘主心。五藏已具、而後生肉。脾生隔、肺生骨、腎生腦、肝生革、心生肉。五肉已具、而後發為九竅、脾發為鼻、肝發為目、腎發為耳、肺發為竅。 | |
| 『淮南子』精神訓 | 古未有地之時、惟像無形、窈窈冥冥、芒芠漠閔、澒蒙鴻洞、莫知其門。有二神混生、經天營地、孔乎莫知其所終極、滔乎莫知其所止息、於是乃別為陰陽、離為八極、剛柔相成萬物乃形。煩氣為蟲、精氣為人。 | 故曰一月而膏（高誘注、始育如膏）。 | 二月而胅 | 三月而胎 | 四月而肌 |
| 『説文解字』巻四上 | | | | 胎、婦兮三月也。 | |
| 『文子』 | 文子曰、人之情欲平、嗜慾亂之、精氣為人、人受天地變化 | 而生一月而膏（初形骸如膏脂） | 二月而脉（漸生筋脉） | 三月而胚（胚胞也三月如水龍狀也） | 四月而胎（如水中蝦蟆之） |
| 『諸病源候論』 | | 懐娠一月、名曰始形[51] | 妊娠二月、名曰始膏 | 妊娠三月[52]、始胎…形像始化 | 妊娠四月、始受水精、以成血脈 |
| 同妊娠転女為男候 | 陰陽和調、二氣相感、陽施陰化、是以有娠、而三陰所會則多生女 | | 但任娠二月名曰始藏精氣成於胞裹 | 至於三月名曰始胎血脈不流象形而變未有定儀見物而化是時男女未分故未滿三月者可服薬方術轉之令生男也 | |
| 『備急千金要方』所引、徐之才「逐月養胎方」の一 | | 妊娠一月名始胚[53]飲食精熟酸美受御宜食大麥毋食腥辛是謂才正 | 妊娠二月、名始膏、無食辛臊、居必靜處、男子勿勞、百節皆痛、是為胎始結 | 妊娠三月、名始胎、當此之時、未有定儀、見物而化、欲生男者、操弓矢、欲生女者、弄珠璣、欲子美好、數視璧玉、欲子賢良、端坐清虚、是謂外象而内感者也 | 始受水精、以成血脈 |
| 『備急千金要方』所引、徐之才「逐月養胎方」の二 | | 妊娠一月始胎 | 二月始膏 | 三月始胞 | 四月形體成 |
| 『醫心方』所収、『産經』の一 | 『産経』云。黄帝問曰、人生何如以成。岐伯対曰、人之始生、生於冥冥、乃始為形。形容無有櫌、乃為始收。 | 任身一月曰胚、又曰胞 | 二月曰胎 | 三月曰血脈、 | 四月曰具骨 |
| 同『産經』の二 | | 懐身一月、名曰始形。飲食必熟酸美、無御大夫、無食辛腥、是謂始載貞也。 | 懐身二月、名曰始膏。無食辛臊、居必静処、男子勿労、百節骨間皆病、是謂始蔵也。 | 懐身三月、名曰始胎。当此之時、未有定儀、見物而化、是故応見王公、后妃、公主、好人、不欲見僂者、侏儒、醜悪痩人、猿猴、無食茴姜兔肉。思欲食果瓜、激[56]味酸葅瓜、無食辛而悪臭、是謂外象而内及故也。 | 懐身四月、始受水精、以盛[57]血脈。其食稲粳、其羹魚鴈、是謂盛血気、以通耳目而行経絡也。 |
| 備考 | ※『産経』の「始収」は「胎収」の意味だろう。<br>※「冥」は『老子』二十一章、窈兮冥兮其中有精。<br>※任身一月…の部分は、『千金要方』の末尾に付される部分に似る。 | ※『医心方』では「始形」の真ん中に線が引かれており、熟語とされている。ここの「始」および「是謂始載貞也」のいずれも、「始」を「胎」意味としてとらえることは可能だろう。 | | | |

| 5ヶ月 | 6ヶ月 | 7ヶ月 | 8ヶ月 | 9ヶ月 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五月而火受之、乃始成氣、晏起□沐、厚衣居堂、朝吸天光、辟寒央（殃）、（其食稻）麥、其羹牛羊、和以茱臾（萸）、毋食□、（以）養氣。 | 六月而金受之、乃始成筋、勞□□、（出）游（於野、數）觀走犬馬、必食□□毆（也）、未□□□、是胃（謂）變腠□筋。⧄。 | 七（月而）木受（授）（之、乃使成骨）、居燥處、毋使（定止）、□□□□□□□□□□□、（飲食）辟（避）寒、□□□□□□□□□美齒。 | 八月而土受（授）（之、乃使成膚革）、□□□□、□□□□□、（是）胃（謂）密（腠理）。 | （九月而石授之、乃始成）豪（毫）毛、□□□□、□□□□、□□□□□、□□□□□□□□□、□□□□、□□□□、□司（伺）之。 | 十月氣陳□□、以爲⧄（□＋斜線）。 |
| 五月而成、 | | | | | 十月而生。生而目視耳聽心慮。目之所以視、非特山陵之見也、察於荒忽、耳之所聽、非特雷鼓之聞也、察於湫湫、心之所慮、非特知於麤麤也、察於微眇、故修要之精。是以水集於玉、而九德出焉、凝蹇而為人、而九竅五慮出焉、此乃其精也。 |
| 五月而筋 | 六月而骨 | 七月而成 | 八月而動 | 九月而躁 | 十月而生乃形体以成五藏乃形 |
| | | | | | |
| 五月而筋（氣積而成筋） | 六月成骨（血化肉肉化脂脂化骨） | 七月成形（四肢九竅成） | 八月而動（動作） | 九月而躁（動數如前） | 十月而生形骸乃成五藏乃形 |
| 妊娠五月、始受火精、以成其気 | 妊娠六月、始受金精、以成其筋 | 妊娠七月、始受木精、以成其骨 | 妊娠八月、始受土精、以成膚革 | 妊娠九月、始受石精、以成皮毛。六腑百節莫不畢備 | 妊娠十月、五臓俱備、六腑斉通、納天地気於丹田、故使関節人神咸備、然可預修滑胎方法也。 |
| | | | | | |
| 始受火精、以成其気 | 始受金精、以成其筋 | 始受木精、以成其骨 | 始受土精、以成膚革 | 始受石精、以成皮毛。六腑百節莫不畢備 | 妊娠十月、五臟俱備、六腑齊通、納天地氣于丹田、故使關節人神皆備、但俟時而生。 |
| 五月能動 | 六月筋骨立、 | 七月毛髪生 | 八月臓腑具 | 九月穀氣入胃 | 十月諸神備、日滿即産矣。宜服滑胎薬、八月即服。 |
| 五月曰動、 | 六月曰形成、 | 七月曰毛髪生、 | 八月曰瞳子明、 | 九月曰穀入胃、 | 十月曰児生出也[54]。[55] |
| 懐身五月、始受火精、以盛血気、晏起、沐浴浣衣、身居堂、必厚其裳。朝吸天光、以避寒殃、其食稲麦、其羹牛羊。和以茱萸、調以五味、是謂養気、以定五臓者也。 | 懐身六月、始受金精、以成其筋骨。労身無処、出遊於野、数視走犬、走馬、宜食鷙鳥猛獣之肉、是謂変湊理細筋、以養其爪、以堅背膂也。 | 懐身七月、始受本精、以成骨髄。労身揺肢、無使身安、動作屈伸、自比於猿、居必燥之、飲食避寒、必食稲粳、肥肉以密腠理、是謂養骨而堅歯也。 | 懐身八月、始受土精、以成膚革和心静息、無使気控、是謂密湊理、而光沢顔色也。 | 懐身九月、始受石精、以成皮毛。六腑百節莫不畢備、飲醴食甘、緩帯自持而待之、是謂養毛発、多才力也。 | 懐身十月倶已成子也。時順天生、吸地之気、得天之霊、而臨生時、乃能啼、聲遂天氣、是始生也。 |
| | | | | | 『産經』の「始生」も「胎」と取ることが可能では？ |

**図表三　五行と身体**

| | 要素 | 『胎産書』 | 『諸病源候論』 | 逐月養胎方 | 『産經』 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4ヶ月 | 水 | 血 | 血脈 | 血脈 | 血脈 |
| 5ヶ月 | 火 | 気 | 気 | 気 | 気 |
| 6ヶ月 | 金 | 筋 | 筋 | 筋 | 筋 |
| 7ヶ月 | 木 | 骨 | 骨 | 骨 | 骨 |
| 8ヶ月 | 土 | （膚革） | 膚革 | 膚革 | 膚革 |
| 9ヶ月 | 石 | 豪（毫）毛 | 皮毛 | 皮毛 | 皮毛 |

## 二、禹臧圖

### 南方禹蔵

「帛」は四つ折りになっていたが、広げた状態では、大きく上下二段に分かれている。便宜上、4つの部分に分けて考察する。（1）上部右、（2）上部左、（3）下部右、（4）下部左、の順にわける。上部左に画かれた図形の中心に「南方禹蔵」と大きな文字で墨書されていた。文字は篆書だが最後を長く伸ばしている。ただ、隷書の特徴である波磔はまだ作られておらず、篆書から隷書の過渡期の文字といってよいだろう。

### 南方は方位か

整理小組は「南方禹蔵」と書されていることから、この図形につけられた名称と判断したようだ。「南方」と「禹蔵」を2つに分けて考察し、

> 本圖在帛書左上部、名《禹臧（藏）》、圖上「南方」係標明方位、以上爲南、與同墓古地圖同。圖的意義見帛書《雜療方》中的《禹藏埋胞圖法》。禹字原加有硃點[58]。

という。

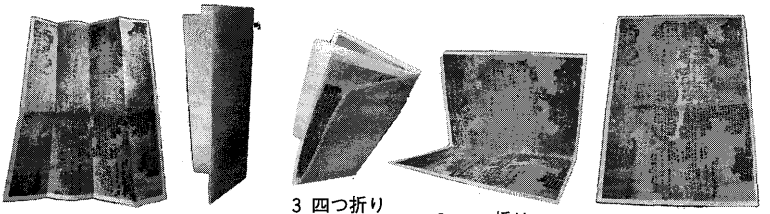
「南方」は方位であり、上を南としている。それは同じく馬王堆出土の地図と同様である。図の意味は『雑療方』の中の『禹藏埋胞圖法』にみえる。「禹」の文字には、もと、朱で点が打たれていたという。

### 南方禹蔵

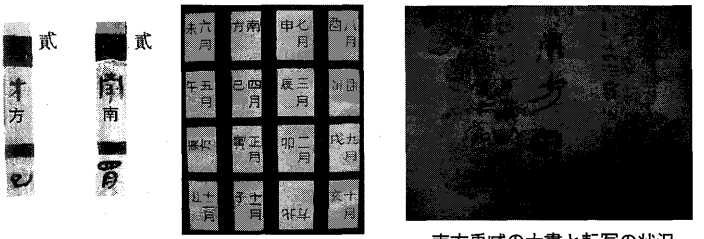
「南方禹蔵」四文字は中央に書かれ図のタイトルのようにみえる。しかし、「南方」は、『日書』の図に四方（東方・西方・南方（図版参照）・北方）を、それぞれ墨書したものがあり、それを参考にすれば方角である。図の部分は、たんに「禹蔵」と呼ばれていた可能性がある。『雑療方』の原文二十四に「禹藏（蔵）䋣（埋）包（胞）圖法」とみえ、これは「禹蔵埋胞圖法（禹が胞衣を蔵埋する圖法）」という意味である。禹蔵は、これを省略し、最初の部分のみを記したものであろう。

### 南と男

「南方」は方位と解釈したが、『胎産書』の冒頭部分に「…三日中從之、有子。其一日南（男）、其二日女殿（也）」という文章があり、

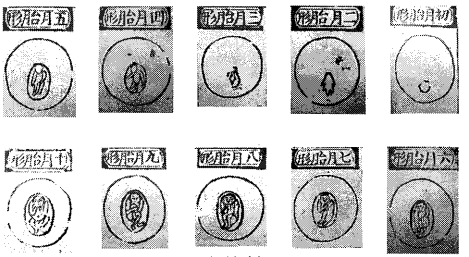


5 折れ線のついた状態　4 さらにもう一度、折る　3 四つ折り　2 二つ折り　1 折る前の状態




『睡虎地秦簡』文物出版社 1990
日書乙書図版の写真（左）136頁、同釋文註釋 250頁
206貳～218貳の書きおこし図（右）。
「南方（東方・北方・西方）」の語がみえる。

南方禹臧の大書と転写の状況




五車抜錦

永代雑書万暦大成

「南」は「女」と対比して使用され、「男」の意味である。「南」と「男」は発音も同じである。「南方」は「有南（男）子方」の省略形とも解することができ、「男子を得るための方法」という縁起もかついでいるのかもしれない。

十二支でも方位をあらわしている。禹蔵圖では、朱線がまさに十二の方角を指し示している。禹蔵圖は全体としても正方形に近く、月ごとにみても方形である。天円地方のイメージがすでにあったのかもしれない[59]。

なお馬繼興氏は前掲『馬王堆古醫書考釋』で「禹蔵圖」を「示意圖[60]」として書き直している。この図はわかりやすいが、もとあった朱線をすべて消去した上で、方形ではなく、時計のように丸い図であらわす。もし、方形であることに、「地」をあらわす意味があるとすれば、円形に書き直す必要はなかったように思われる。

## 図が上で文章が下にある理由

縦書きの文章は、ふつう上から下に書き、また右から左に書く。けれども、必ずしも、そうとばかりはいえない。この禹蔵圖の表を例にとってみよう。この図を書く者はイメージの上で南面している。十二支の方角でいえば、子（北）の位置に立っている。そして右（時計）回りで進む。開始位置はもっとも下の左にある。正月は足下の左下にあり、二月はその上にあり、三月はそのまた上にあり、四月はそのまた上であるが、ここから、左から右に進み、次に五月、六月、七月まで行き、今度は下にさがり、八月、九月、十月と最下段まで行き、つぎに左へ十一月、十二月と進んで一巡する。

正月から四月までは階段を上に積み上がっていくような進み方をして、上段に至れば、左から右に進む。階段を下から上にあがっていくような書き方は、甲骨文がそうである。石を積む時に、まず、下から積んでいくのに似ている。『易』の乾坤の卦も下から書く。数字の一、二、三、四（横棒を四つ重ねたもの）も本来、算木を並べたところから発しているとすれば、下から順に積み上げたのかも知れず、書き順も本来は下から書かれていた可能性もあるだろう。

『五十二病方』はまず半分に折られていた。帛の幅が広すぎるため、そのまま書けば縦に長すぎる。そのため、折って幅を半分にし、書きやすく、また読みやすくしている。『胎産書』の場合も上下に分かれるが、帛全体は、どう考えればよいのだろう。①妊娠→胎児の成長→出産（『胎産書』、下半分に書かれている）→②胞衣の埋蔵（「禹臧圖」、上半分の左側に描かれる）→③子の運勢（「人字圖」、上半分の右側に横向きに描かれる）と見ていけば、全体の流れはスムーズである。帛全体は、おそらく、まず右下の文章の部分を最初に読むように書かれていたのだろう。右下から左下部分にうつり、それ

から、左上の部分の図に移り、そのあと、右上の人字圖に行くという順序である。またこの種の帛が折って幅を半分にするとすれば、ふつうに右から読んでいくことになる。

**胞衣の埋め方**

胞衣の埋め方に関しては『雑療法』原文二十三に説明がある。「禹が胞を蔵埋するという圖法に、胞を埋めるのは、小時、大時の在る所を避け、産まれ月によって、寿命の長くなるものを選んで、胞を埋める、とある[61]」とみえる。

ここでは、その原理的な意味について簡単に述べる。「小時」は月建（北斗）、「大時」は太歳（木星）をさし、その方角を犯すことは死を意味する。「小時、大時の在る所」という言い方からもわかるように、時間をあらわす言葉が「所」、つまり「方角」と結びつけられている。方角は「十二支」であらわされている。そもそも、方角と時間は本来、何の関係もなかったと思われるが、時間を循環させる表現方法によって、それが密接に関連するようになる。

世界史の年表のように直線的に時間が進むと考えるのが、直線的時間である。これは時の進行とともにまっすぐに進んでいく。一方、天体の運行、太陽や月の動きのように、循環するものとして時間を捉える。これが循環的時間[62]である。直線的時間をあらわす時計を作ることは難しい。そのため、毎日の繰り返しは、針がぐるぐる回る柱時計の時計盤のような形で表されることとなる。これは時間を二次元の平面上に模式図として表現したものである。時間は本来、二次元でも平面でもないが、それをこのような模式図の中に押し込めたことから、さまざまな可能性が開かれた。

一方、方角は本来、空間の中のある一点を基点としての相対的な位置関係である。上下を無視すれば、これもまた平面という二次元の中に閉じ込めることができる。先に見た『日書』では、東西南北が示されていた。禹蔵圖では「南」と「十二支」が使用されている。古代の十二支は年、月、日、時に使われ、時間を表す際にも不可欠な単位であった。

時間、方角が、ともに平面に表され、なおかつ、どちらも同じ単位である十二支が用語として用いられた。紛らわしいが、そのことにより、方角と時間はぴったりと重ね合わされた。時計盤に磁石の方位盤を重ねたようなものである。午の位置はお昼の十二時であるが、それは方角的には「南」となる。

時刻のかわりに十二ヶ月という月をこの盤の上に重ねたと想像してみてほしい。それが「禹蔵圖」のアウトラインである。ただし、ここでは円盤ではなく、方形であるため、子（12）の位置と午（6）の位置が、ぴったりと上下にはこない。なぜ方形なのかという説明

がないが、天円地方に則り、方形で地をあらわしているのかもしれない。

禹蔵図は十二の月からなるが、一ヶ月ごとに上記のような方位は記されていない。それは暗黙の了解事項である。ここに理念的な寿命10歳～120歳を当てはめてみると、その右の図、概念図になる[63]。右回りに30度移動するごとに寿命が10歳ずつ増えていき、最長の寿命は120歳となる。この理念的な図を基準として、『淮南子』にいう

**図表四**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4 | 5 | 6 | 7 |
| 3 | | | 8 |
| 2 | | | 9 |
| 1 | 12 | 11 | 10 |

○禹蔵図の月だけを書き出したもの

巳 午 未
辰 卯 寅 ― 月 ― 申 酉 戌
丑 子 亥

○方位図

40 50 60
30 20 10 ― 月 ― 70 80 90
120 110 100

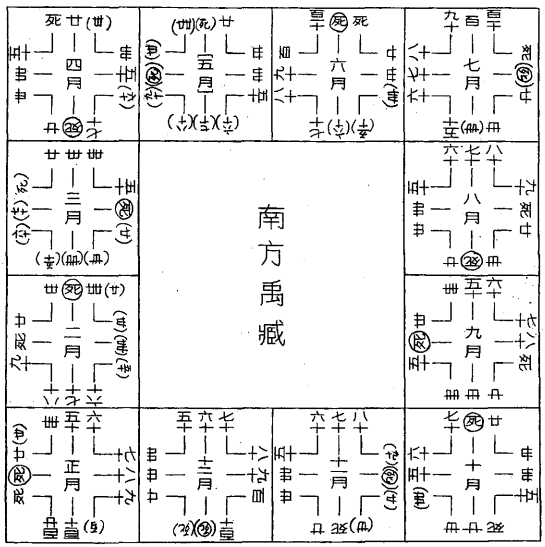
○大時（死）・小時（死）が入らないと仮定したときの概念図

「大時（咸池）」と「小時」の位置が月ごとに移動していく。移動には法則性がある。「大時」は毎月、90度ずつ時計まわりに動く。つまり時計でいえば、3、6、9、12の位置に動いていく。これは神煞の動き方と同様である。「小時」は毎月、30度ずつ時計まわりに動いている。禹蔵図では、その位置に「死」と書かれている。ここでは、わかりやすくするために「大時」の「死」を○で囲んだ。正月に「大時」は卯の方角にあり、二月には午の方角にある。90度ずつなので四ヶ月で一巡し、一年で三巡する。一方、正月に「小時」は寅の方角にある。これは30度ずつ循環するため、ちょうど一年で一巡する。この「大時」「小時」の二つの基準が同じ盤面で月ごとに移動していく。

それでは寿命は、どのようにして決められるのだろう。これには法則がある。それは「大時」「小時」つまり「死」のすぐ後の方角は「20」になるというものである。ただし例外がある。それは大時が卯つまり東の方角にある時は、その次の辰の方角は20ではなくて30になるというものである。いずれにしても、「死」でいったんリセットされて、「20」あるいは「30」から、また始まると考えればわかりやすい。

この図では欠けているところを（　）をつけて補った。また誤写かと思われるものにも（　）をつけ、その中に正しいと思われる数字を入れている。大時・小時は規則正しく動くため、欠けていても、

**図表五**




『馬王堆漢墓〔肆〕』134頁、附圖二より
「死」には30度ずつ動く小時の「死」と90度ずつ動く大時の「死」がある。区別するために大時の「死」を○で囲んだ。小時の「死」のあとは寿命がリセットされて20になる。大時の「死」のあとは法則性が不明。小時の「死」と同様に寿命がリセットされて20になることが多い。ただし、30、40になる場合もある。東側の「死」のあとだけは寿命がリセットされて30になると考え、そうなっていないところは誤記と考え、（　）で補ったが判然としない。

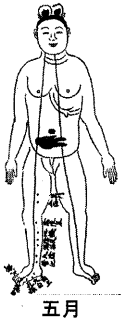
その場所は確定しうる。また先ほどあげた法則通りに数字が嵌め込まれていくため、抜けているところも確定しうる。この推測による数字は（　）の中に表した。微妙にその配列に合致していないものもあり、その場合は正しいと思われる数字を、書かれている数字の後ろに（　）に入れて表した。

具体例で説明してみよう。十二月は「大時」の「死（太字で表した）」と「小時」の「死」が連続する。そのため、（**死**）（子）・（死）（丑）・20（寅）・30（卯）・40（辰）・50（巳）・60（午）・70（未）・80（申）・90（酉）・100（戌）・110（亥）と規則正しく配列される。この場合、最高寿命は110歳となる。二月は、70（子）・80（丑）・90（寅）・死（卯）・20（辰）・30（巳）・**死**・40（20）（午）・（30）（未）・（40）（申）・（50）（酉）・60（戌）・70（亥）となる。大時の死の後の40は20になるべきところなので（　）内に補った。この場合、最高の寿命を得る場所は、寅の方角で90歳ということになる。

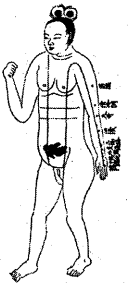
## 図の形

この図にみえるL字形（カギ形）等の記号は何なのだろう。それらによって十二の方位にきれいに分けられている。中山王国出土の石製六博棋盤[64]がこの形によく似る。動物の文様等が浮き彫りにされている（図版参照）が、その区画を示す記号が禹蔵圖によく似ている。六博は博（双六の類）のことで、博奕の語源ともなった遊戯に用いられたものである。サイコロに相当する六本の箸を振って棊を進める。サイには神意があらわれるのであろうが、コマの進め方

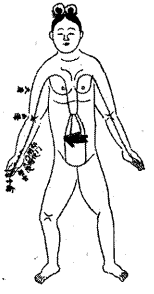
石製六博棋盤　拓本



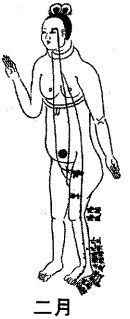
五月



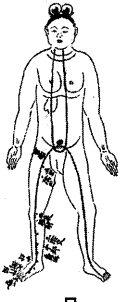
四月



三月

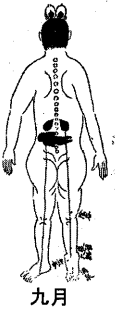


二月



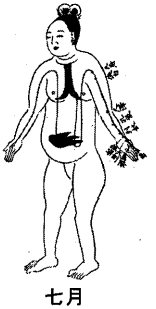
一月

十月

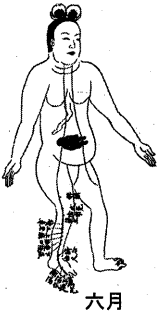


九月

八月



七月



六月

『醫心方』巻廿二 新文豐出版 1976

は人智が必要である。「六」は天地四方の六つの方位を指し、当時の宇宙論の根幹を示す言葉であろう。

禹蔵圖も六博も四角四方であるが、この形は後に鏡の文様に取り入れられて、ＴＬＶ字鏡と呼ばれるようになる。中国では博局鏡という。これらは式盤にも似る。そこでは四角い盤の上に回転する半球が載せられる。動かすことにより、いくつもの図を書く必要がなくなるのであろう。式盤には方位と時間だけでなく天の星座まで記されている。

占いは神の意志をあらかじめ知る方法だが、人智によって悪い運勢を変える余地もある。禹蔵圖では神というよりも天といった方がよいが、大時・小時の動きが天の意志にあたるのだろう。これは規則正しい宇宙の運行を反映しているようにみえる。大時・小時以外の命数を選ぶのが人智であり、この図は宇宙の原理と、それと相関する人間の運勢を解読したものなのだろう。

**胞衣の埋め方の実際例**

胞衣の埋蔵のことは『醫心方』所収の『産經』にみえる。また民俗学では永尾龍造『支那民俗誌[65]』児童篇に「胞衣の處置と俗信」・「胞衣の埋め方と俗信」として紹介されている。「胞衣は子供の臍の緒と相連携して居ると云ふ関係から、胞衣と子供との間には、密接不離の関係があるやうに考へられてゐるのである。もと胞衣と子供とは同じく母腹に在つて、しかも同時に出て来るものであるから、これを小児と同程度の重要さを持つものと視て大切にするのである[66]」というのがその理論である。

これはたんに中国だけのことではない。フレーザーは「臍の緒や後産が保存されて適当な取扱かいを受ける時は栄達するのに引きかえ、もしそれが害われるか失われるかすれば災厄に見舞われると信じられているのである。…スマトラのバタク族もまたもまた胎盤を赤ん坊の弟または妹とみなして家の床下に葬る…。カロバタク族は、人間のもつ二つの霊魂のうちで、床下の胎盤と共にあるものこそ真実の霊魂であるとさえ確信している。…このように、世界中の多くの地方で、臍の緒、または更に一般的には後産は、嬰児の兄弟もしくは姉妹である生き物と見なされ、あるいは子供の守護霊また、その魂の一部を宿す物質的存在と見なされている[67]」と述べている。

中国古代の胞衣の埋蔵と寿命の関係に関しても、それらの理論は適用されるだろう。丹波康頼の『醫心方』にも中国の事例が紹介されている。胞衣の埋蔵がその人の運勢に影響を与えるという考え方は、後世、陰宅風水で、祖先の骨をどこに埋めるかによって、子孫の運勢が規定されるのと似ている。日本の考古学的な具体例に関しては『埋甕[68]』に詳しい。

## 禹と禹蔵図

「禹蔵圖」の「禹」は儒教では夏王朝の始祖とされる人物。民間では行神（旅行の安全を司る神）とされている。『五十二病方』では禹の名を出して悪鬼を威嚇し、禹の歩行法である禹歩を行って治療する方法が記され、『千金翼方』巻二九禁經上にも継承されている[69]。

ここでは『産經』にみえる禹の話[70]を紹介したい。

昔、禹、雷澤の上に於いてす。一婦人、悲哭して来たる有り。禹、其の由を問う。答えて曰く、妾、子を産みて皆な夭し、一も生きて在る無し。故に哀哭す、と。禹、此の法を教え、子皆な長壽、復た夭失する無きなり、と。産胞衣を取り、善く択び、草塵を去り、之れを洗うこと清くす。一土人を作り、児男を生む者は男像を作り、児女を生む者は女像を作り、絳衣を以て土人を裹む。先ず三錢を以て新甕中に置き、已にして土人を取り錢上に著け、復た子の胞を取り錢上に置き、以て甌を蓋い、周りをして密封し、之れに泥せしむ。算多き地上を案じ、児の公をして自ら掘りて之れを埋めしむ。畢りて、祝して曰く、一錢は汝が地主を領せんが爲、一錢は汝が壽、算を領せんが爲、一錢は汝が口食を領せんが爲、と。訖りて左足を以て之れを踏み、堅く築くこと上の法の如くす。

後世の書ではあるが、禹が嬰児を健全に発育させる方法を知っており、それが胞衣の埋葬法と深く関わっているとされたことがわかる。またここでは、泥人形をつくり、赤い衣を着せて、埋めるという。

以下、『南方禹蔵圖』の理解のために、『産經』にみえる胞衣の埋蔵に関する、さまざまな説を紹介する。生まれた日（十干）と胞衣を埋める日（十干）の吉凶、また胞衣を埋める月と方位と子の寿命との関連等が記される。いずれも胞衣を埋める方法と子供の寿命が関連するという基本的な考え方は同様である。

「『産經』に云う、正月亥子、二月丑寅、三月巳午寅、四月申酉卯、五月亥酉、六月寅卯辰、七月午、八月未申、九月巳亥、十月寅申、十一月未午、十二月申酉（吉日）（『醫心方』巻二三、蔵胞衣吉凶日法第十六）」。

これは月によって、吉日があらかじめ決まっている。けれども、子供の寿命が何歳までといった具体的なことは、全く記されていない。また、ここでは埋める日であり、埋める方角ではない。これによく似たものは日本の暦の中に伝わっており、ごく近い時代にまで残っている。たとえば大正時代発行の『新版三世相大鑑[71]』にも「胞

衣を納る方の事」として、「…丑年ハ　うしの方か午ひつじの間…」と書かれている。年ごとの変化の様子は大まかには把握することができるが、馬王堆のものほど整理された法則性はなく、また馬王堆のものとの厳密な整合性はない。

このような習俗は、おそらく産婆などを通して伝わったものであろうが、婦人科の医院で子を産むようになって急速に廃れたと思われる。

「又た云う、甲乙に生まるれば、丙丁に蔵す。丙丁に生まるれば、戊己に蔵す。戊己に生まるれば、庚辛に蔵す。庚辛に生まるれば、壬癸に蔵す。壬癸に生まるれば、甲乙に蔵す（吉日）（同上）」。

ここでは生まれた日と胞衣を埋める日が機械的に相関している。このような干支に関する呪術の特徴は機械的な操作によって、日や方位などが求められ、そのことが合理性をもつようにみえることである。ここでは最短の場合は翌日、最長の場合でも三日後に埋めるということになる。

「『産經』に云う、春は甲乙を以てする無かれ。夏は丙丁を以てする無かれ。秋は庚辛を以てする無かれ。冬は壬癸を以てする無かれ。右の四時は忌日。皆な悪し。避けざれば身（生）子倶に亡ぶ（忌日）（同上）」。

ここからは吉日ではなく、忌み日である。また十干を四季の四つに分類しているため、戊癸の二つだけが忌み日ではない。

「又た云う、甲辰・乙巳・丙丁午未（丙午・丁未か）・戊申・戊戌。右の日、胞を蔵する勿かれ。浄め洗うこと十餘過、瓮中に置き、須く良日を待ちて乃ち之れを蔵す可し（忌日）（同上）」。

「又た云う、月の十日、廿日を避け、月の未だ盡きざるの一日は胞を埋む可からず。大凶なり（同上）」。

「又た云う、月の一日、十一日、廿一日を避けよ。凶なり。又た云う、建・除・破・厄・閉日を避けよ。大凶なり。又た云う、児の生日を以てする勿かれ。児をして壽ならざらしむ。又た云う、胞を埋むるは、牢日を以てすれば、小児死す（牢日の法は『湛餘経』中に在り）（同上）」。

ここには「建」のことがみえる。

「凡そ胞胎を蔵せんと欲する者は、先ず詳らかに十二月図を視る可し。算多き處の者は壽有り。算少なき処の者は壽少なし。或いは算多き地なる者も、忌神併さんとする者ならば、亦た当に之れを避くべし。次に算を取ること多ければ、亦た吉なり。又た既に壽地を得て、其の日、悪なる者は、待つに良日を以て乃ち之れを埋むれば、吉。又た壽処為ると雖も、必ず高燎向陽の地を得よ。能くする者は壽長く、智高く、富貴極むる無きなり。其の高燎の地なる者は、遠近自在にして苦しむ無し（蔵胞衣吉方第十八）」。

ここにみえる十二月圖というのが、馬王堆の禹蔵圖に近いように思われる。禹蔵圖は後世、十二月圖と呼ばれていたのかもしれない。ただし、『醫心方』では、その図で寿命が多くても、他の基準のものと照らし合わせてよくない場合は、変更すると書かれている。いくつかを組み合わせて使用したのであろう。

「又た云う、經に曰く『産子の胞胎を蔵せんと欲する者は、先ず十二月神圖を視よ。八神、諸神の方に在るは至り犯す可からず。之れを犯さば、咎重し。慎しまざる可からず』と（同上）」。

馬王堆のものは、大時と小時のみであったが、ここには「十二月神」とその図のことが記されている。「算」が多いものは寿命が長く、少ない者は寿命が短い。生まれた時から寿命が決まっているという定命論の考え方である。しかし完全に決定しているわけではなく、やり方によって微妙にかわる。そこにこそ、これらの書物の価値が存する。ここでは胞衣を埋める時間（日の良し悪し）と場所について述べられる。日当たりのよい高い場所がとくによいとされる。それは寿命だけでなく智恵や富貴ともかかわるという。また諸神の居場所を犯してはいけないといった禁忌も多い。

「正月胞衣を蔵するは、丁の地、吉、年一百（是れ天徳の地）。丑の地は年百十、而れども月煞（殺）併せて在り。亦た小児、禍害の地、故に其の善と成さず。他皆な此れに効う。又た日虚月徳、丙に在り、天道、辛に在り。

二月胞衣を蔵するは、人門の地、吉、年、九十（是れ天徳、人道の地）。天門、鬼門は吉神有りと雖も、而れども是れ小児、禍害絶命の地、故に不吉。丑の地、壽多くして小児、行年立つる所の地、故に犯す可からず。至兇なり。又た乙丁辛の地、悪神無し、之れを用う可し。

三月胞衣を蔵するは、庚の地、吉、年、九十二（是れ天徳、人道の地）。又た壬地大吉（是れ天道の地）。又た丁の地、吉。

四月胞衣を蔵するは、辛の地、吉、年、八十（是れ天徳、人道の地）。又た丁の地（是れ天道）。

五月胞衣を蔵するは、乾の地、吉、年、九十一（是れ天徳、人道の地）。又た乙辛の地、悪神無し。

六月胞衣を蔵するは、壬の地、吉、年、七十八（是れ天徳、人道の地）。又た乙辛の地、悪神無し。

七月胞衣を蔵するは、癸の地、吉、年、七十八（是れ天徳、人道の地）。又た辛の地（天道）壬地、大吉。

八月胞衣を蔵するは、艮の地、鬼門、吉、年、八十六（是れ天徳、人道の地）。又た乙丁辛の地、悪神無し。

九月胞衣を蔵するは、甲の地、吉、年、八十五（是れ天徳、人道の地）。又た丙の地（天道、大吉）、癸地、悪神無し。

十月胞衣を蔵するは、乙の地、吉、年、八十四（是れ天徳、人道

の地）。又た甲の地（月徳、大吉）、癸地（天道）、丁地、悪神無し。

十一月胞衣を蔵するは、巽の地、戸地吉、年、百廿（天徳、人道の地）。又た乙辛癸の地、悪神無し。

十二月胞衣を蔵するは、丙の地、吉、年、百（天徳、人道の地）。又た乙辛の地、悪神無し。（蔵胞衣吉方第十八）」

ここでは月ごとの胞衣を埋める方位とそれによって得られる寿命がしるされている。これは禹蔵圖にえがかれているところと基本的に同じ考え方である。

『禹蔵圖』に関しては、猪飼祥夫「馬王堆「南方禹臧」図考」（「竜谷史壇」一〇三・一〇四号、竜谷大学史学会、一九九四）が詳しく、李建民『南方禹蔵圖箋証』にも考証がある。それらを参考にしながら考察する。

『南方禹蔵圖』は帛書の左上方に描かれている。図は「示意圖（馬繼興八二一頁、上が南）」に示されるように右回りに時間と方位が進んでいく。ここの内容は『雑療法』原文二十三の「埋胞、避小時、大時所在（胞を埋むるは、小時、大時の在る所を避く）」と関連する。小時、大時の説明は『淮南子』天文訓に「大時者、咸池也。小時者、月建也（大時は咸池なり。小時は月建なり）」とみえる。

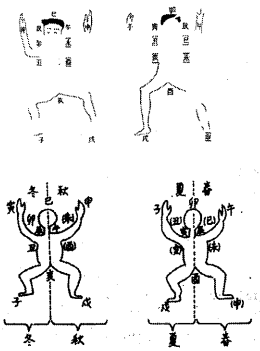
たとえば正月生まれの子供であれば、月建である寅（東北）の方角と咸池つまり太歳の卯の方角に胎盤を埋めると子供が死亡すると

されば、当然、その方角は避ける。『南方禹蔵圖』によれば、正月の、子の方角は、寿命百一十、丑は百廿、寅は死、卯は死、辰は廿、巳は卅（「卅」のあやまり）、午は五十、未は六十、申は七十、酉は八十、戌は九十、亥は（一百）となっている。

## 三、人字圖

「（1）上部右」の右半分あたりには、「人字圖」と呼ばれる図が描かれていた。「（1）上部右」の左半分から「（2）上部左」全体に渡り、図が描かれている。人字図は大きなものではない。本来、空白部分が多かったが、写真版では「（3）下部右」から裏うつりした鏡文字に隠れて、目を凝らして見ても、どこにどのように描かれているのか判然としないが、どうも頭が左側にあるようにみえる。つまり通常の文字の方向から九十度左に回転させて図を描いている。なぜ、そのような向きになっているのかは不明である。この部分は帛の中では右の上部に位置するものの、子が生まれてから後のことに関連する図であること等を考慮すると、最後に描かれたのであろう。

この図によく似たものが『日書』（工藤、李）にあり、それを参考にした復元図（図版参照）がある。黒く塗りつぶしたような太い

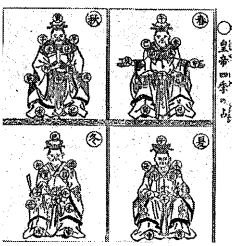


人字圖
上（写真）・上左
『馬王堆漢墓帛書肆』
人字図（復原示意図）
図中の（ ）内の文字
は『睡虎地秦墓竹簡』
によって補った。
『馬王堆古醫書考釋』
815頁

人字圖『日書甲種』
『睡虎地秦墓竹簡』
文物出版社 1990
上 写真 101頁
左 線描 206頁

明劉雙松
『妙錦萬寶全書』
1612 坂出祥伸・
小川陽一編
中国日用類書集成
汲古書院所収

李憲章通勝『包羅万有』聚寶樓 辛巳（2001）



吉村藤作『新版三世相大鑑』
心友社 1919 58頁

『永代大雜書萬暦大成』
神宮館 237頁

墨線で人の姿が描かれる。しいていえば金文の「大」あるいは「天」という文字に似ている。「大」という文字は正面形であり、「天」という文字も、人の頭の部分、顛（てん）が強調された人の正面形である。「人」は元来、人の側面形であるため、「人字圖」という名称には微妙に不満が残るが、「人」という文字というよりも、人を象った文字とといればよいのだろう。

『日書』のものは図が二つある。馬王堆のものも同様だとされている。後世のものは皇帝四季圖とよばれているが、四季と対応しており、四つである。これらはさまざまな書物に載せられているが、人字圖から発展していったものとみなされている。

これは『醫心方』にはみえない。また『事林廣記』など宋代の日用類書にもみえないが、明代の日用類書の『妙錦萬書全書』（図版参照）にみえる。また、三世相の類の書物には数多くみえる。前掲『新版三世相大鑑』（図版参照）や、昭和の発行である神宮館の『天保新選永代大雑書萬暦大成[72]』にもみえる。中国で現在、流布している日用類書の類にも同じものがある。二〇〇〇年の年末に福建省厦門で購入した『包羅萬有[73]（図版参照）』に紹介されていた。内容は毎年、あまり変わらないようである。人の図は複雑なものへと変化しているが、基本原理は同じである。いずれもその図を説明した文がつけられている。

春夏秋冬の○（十二支）の日に生まれたものは、皇帝の○（頭、胸、腹、手、足）に相当し、それは○○だという図式になっている。頭の部分が最も善く、足の部分が最も悪い。

春夏秋冬によって十二支の配列はずれていくが、変化の法則は、それほど、難しいものではない。（**図表六・図表七**）

**図表六**

『胎産書』人字圖1　（　）内は法則にもとづいて補なったもの。（※前掲『日書』を参照）

| | 図1 | 図2 | 図3 | 図4 |
|---|---|---|---|---|
| 頭（中） | 卯 | 卯 | 巳 | 巳 |
| 頸（左） | 辰 | | 午 | |
| 在外（左） | （巳） | | （未） | |
| 手（左） | 午 | | 申 | |
| 腋（左）（未） | | （酉） | | |
| 足（左） | （申） | | 戌 | |
| 奎（中） | 酉 | 酉 | 亥 | 亥 |
| 足（右） | | 戌 | | 子 |
| 腋（右） | | （亥） | | 丑 |
| 手（右） | | 子 | | 寅 |
| 在外（右） | | 丑 | | 卯 |
| 頸（右） | 寅 | | | 辰 |

**図表七**

『胎産書』人字圖2（馬繼興氏の図にもとづき、左右を補った

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|---|---|---|---|---|
| 子 | | 右手 | | 右足 |
| 丑 | | 右在外 | | 右腋 |
| 寅 | | 右頚 | | 右手 |
| 卯 | 頭 | 頭 | | 右在外 |
| 辰 | 左頚 | | | 右頚 |
| 巳 | 左在外 | | 頭 | 頭 |
| 午 | 左手 | | 左頚 | |
| 未 | 左腋 | | 左在外 | |
| 申 | 左足 | 左手 | | |
| 酉 | 奎 | 奎 | 左腋 | |

どちらの図でもわかることだが、たとえば、春の卯の日に生まれた者は、その運勢は、「頭」となり、その解釈が示される。しかしながら、その一日前、春の寅の日に生まれた場合は、対応する身体の位置は何もなく、占いの対象とはならない。春は、戌・亥・子・丑・寅の五つに関しては何の解釈もない。同様に夏は辰・巳・午・未・申、秋は子・丑・寅・卯・辰・巳、冬は午・未・申・酉・戌がそうである。要するに卦の無い易占のようなもので、占いの形式としては不十分のように思われる。

その原因は春に該当する十二支が7つしかないことによる。それは人の図を半分に分けて春・夏、また秋・冬としたことにもよるだろう。

この卦の無い占いを解消させるためには、一つの季節に十二支がすべて配当されるようにすればよい。そのためには、たとえば胸・腹といった部位を増やす方法も可能だが、後世のものは、一つの季節に対して一人ずつ配当するという方法をとった。そのため4名の人物が描かれている。

以下、その場合、どのように配当されているかという簡単な概念図を記す。（**図表八**）

**図表八**

皇帝四季の図（『包羅萬有』）（中国・香港）

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|---|---|---|---|---|
| 子 | 頭 | 腰下跟 | 右肩 | 腰下跟 |
| 丑 | 右胸 | 左手 | 左手 | 右膝 |
| 寅 | 左足 | 右足 | 右膝 | 右胸 |
| 卯 | 右肩 | 右肩 | 右胸 | 左肩 |
| 辰 | 右膝 | 右膝 | 左足 | 右足 |
| 巳 | 右手 | 右手 | 右手 | 頭 |
| 午 | 腰下跟 | 頭 | 左肩 | 左手 |
| 未 | 左手 | 右胸 | 左胸 | 左膝 |
| 申 | 右足 | 左足 | 腰下跟 | 左胸 |
| 酉 | 左肩 | 左肩 | 左膝 | 右肩 |
| 戌 | 左膝 | 左膝 | 右足 | 左足 |

腰下跟の「跟（こん）」は、「かかと」の意味だが、「根（こん）」に通じ、ここでは男根の意味だろう。陰部をさす。

4名は、いずれも男性である。ここでは皇帝とされている。よくみると春の人物は若くてヒゲがないが、夏、秋、冬となるにつれ、ヒゲが長くなり、冬のものは、ヒゲが白くなっている。四季を人生の年齢にあてているのだろう。ただし、占いの内容にかかわるのかどうかは不明である。

人物ごとに十二支がそろっている。そのため、卦の無い占いという状況は生じない。ただし、馬王堆で在外とされたものはなく、いずれも身体の一部分である。馬王堆の場合は頭から始まり、人物の輪郭にそって一周する。『包羅萬有』の場合は動き方の法則があるようにもみえるが未詳である。

次に、昭和癸亥（一九八三）の序文のある『永代大雑書萬暦大成』のものを検討したい。（**図表九**）

この場合は胞衣の埋め方のように、選択する場所によって、運勢が変わるということはない。その意味では選択の余地のない単純な占いである。ただ季節に応じて変化している。

**図表九**

皇帝四季の占（日本・昭和）

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|---|---|---|---|---|
| 子 | 股（もも） | 頭 | 右肩 | 腰下跟 |
| 丑 | 左足 | 右肩 | 左手 | 右膝 |
| 寅 | 右足 | 左足 | 右膝 | 右胸 |
| 卯 | 右胸 | 右胸 | 右胸 | 左肩 |
| 辰 | 右手 | 右膝 | 左足 | 右足 |
| 巳 | 右肩 | 右手 | 右手 | 頭 |
| 午 | 頭 | 股 | 左肩 | 左手 |
| 未 | 左肩 | 左肩 | 左胸 | 左膝 |
| 申 | 左手 | 右足 | 腰下跟 | 左胸 |
| 酉 | 左膝 | 左胸 | 左膝 | 右肩 |
| 戌 | 左胸 | 左膝 | 右足 | 左足 |
| 亥 | 右膝 | 左手 | 頭 | 右手 |

## おわりに

『胎産書』は、わずか一枚の帛であるが、さまざまな貴重な情報が詰め込まれている。竹簡や木簡ではなく帛であることは、図を描くのに適している。墨と朱が使い分けられていることも興味深い。文章の部分には朱で罫線が描かれているが、現在も中国には朱の罫線の便箋がある。罫線は、竹簡や木簡には自然にあった縦の区切りを人為的に示したものであろう。文章部分は胎児の成長と胎教につ

いて書かれている。本来、図とセットになっていたかどうかは疑わしい。儒教の胎教の話とは無関係である。おそらく民間に伝わっていた話がベースになっているのだろう。『胎産書』にみえる「始」の文字は、「胎」の意味で使われていたと思われ、そう解釈する方がわかりやすい。けれども、文法的には「始めに」とも読めるため、後世の『逐月養胎方』には「始胎」という表現がみえる。

胞衣を埋める図は本来、『禹臧埋胞圖法』(『雑療法』にその名がみえる)と呼ばれていた。その省略形が「禹臧」であろう。「南方」は整理小組の解釈は南という方位である。『日書』の図に四方にそれぞれ、南方・北方・東方・西方と書く例がある。ここは中心に南方と書かれており、やや不自然だが、方位と考えた。「南」は「男」にも通じるため、男子を得るための方法という意味も含むように思われる。胞衣を埋めることに関する俗信は最近まで残されている。

「人字図」は睡虎地秦簡の『日書』に同様の図がある。その後、同種のものは、久しくあらわれないが、『日用類書』の中に出現し、現在、香港や中国で流布している暦の書物の中に同種のものがある。

要するに『胎産書』に書かれている図や文章は世俗に伝わるもので、宮中の書庫に所蔵するようなものではなかったのかも知れない。けれども、むしろ、そのような中にこそ当時の人々の意識や考え方をうかがうことができると思われる。

## 注

1 中医古籍出版社、二〇〇五、三二頁。

2 唐、孫思邈『備急千金要方』所引。

3 『醫心方』所収。『隋書』經籍志、五行に『産經』一巻、宋、鄭樵『通志』藝文略、産乳にも『産經』一巻とみえる。

4 「馬王堆出土『胎産書』について」、中國出土資料學會、平成一八年度大会　二〇〇七年三月一七日、於成城大学、発表概要より。

5 この内容は鈴木千春「中国古代・中世における逐月胎児説の変遷」『日本医史学雑誌』五〇巻四号、五六九―五八九頁、二〇〇四に詳しい。

6 「馬王堆医帛『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』の形態復元に関する新知見」、中国出土資料學會報、二〇〇七年三月一七日第三四号。

7 小曽戸洋他『五十二病方』、東方書店、二〇〇七、Ⅳ頁。

8 真柳誠「書評『馬王堆漢墓帛書〔肆〕』」『日本医史学雑誌』三三巻二七二―二七四頁、一九八七。

9 同右。

10 『馬王堆漢墓帛書』、文物出版社、一九八五。

11 婦孕三月也。

12　中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』修訂増補本、中華書局、二〇〇七、四一二頁、一一一二七、戦国、青州市博物館。陳胎は姓名、槃戈は、ほこ。

13　『楚簡帛文字編』、一〇三頁。

14　科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、中国古代養生思想の総合的研究、関西大学文学部、一九八七。

15　文物出版社、二〇〇一。

16　湖南美術出版社、一九八八。

17　原文は留形。『馬王堆漢墓帛書（肆）』、文物出版社、一九八五、一三六頁、前掲『馬王堆古醫書考釋』湖南科学技術出版社、一九九二、七八一頁は流形と解す。また、留は胎と同源字という。鈴木氏は、「流形」。

18　管仲に仮託、古いものは春秋末～戦国初期、おおむねは戦国後期から漢初。日原利国編『中国思想辞典』「管子（金谷治）」。

19　前漢、劉安［一七九～一二二B.C.］撰、劉文典集解『淮南鴻烈集解』、第二版、臺灣商務印書館、一九七四を参照。

20　『太平御覧』は「血」。

21　後漢、許慎［三〇～一二四］撰。

22　『太平御覧』太平御覧卷第三百六十　人事部一　叙人より。『文子』は老子の弟子の文子に仮託。『列子』・『荘子』・『淮南子』に一致するところが少なくないという。日原利国編『中国思想辞典』「文子（鶉飼尚代）」、研文出版、一九八四、三六九頁を参照。

23　隋、巣元方（煬帝［在位、六〇四～一八］の頃）撰。巻四十一。

24　巻四十一。

25　唐孫思邈撰［六五二成書］、宋林億等校正　四庫全書、巻二、婦人方、養胎第三。鈴木千春氏は、林億らの改訂を経ていない『新雕孫真人千金方』との比較考察を行っている。

26　丹波康頼［九一二～九九五］撰、巻二十二。

27　『新字源』「胎」、角川書店、一九八九（一九六一初版）八一九頁。『大漢和辞典』巻九、「胎」、大修館書店、一九五八、二七四頁。

28　胚胎未成、亦物之始也。

29　物則形也。

30　宏業書局、中華民国六四年。

31　前掲『馬王堆古醫書考釋』七八四頁。便宜上、簡体字を日本の漢字に変えた。

32　水者、地之血氣、如筋脈之通流者也。

33　人、水也。

34　男女精氣合、而水流形。

35　加藤千恵氏は、「女性の月水」と捉えている。『不老不死の身体』

大修館書店、二〇〇〇。

36 上善若水。水善利萬物而不爭、處衆人之所惡、故幾於道。（第八章）

37 天下莫柔弱於水、而攻堅強者莫之能勝、以其無以易之。（第七八章）

38 始皇推終始五德之傳、以為周得火德、秦代周德、從所不勝。方今水德之始…。

39 坂出祥伸、小川陽一編、中國日用類書集成、汲古書院、一九九九。

40 同右所収、明、龍陽子輯、万暦三十五年（一六〇七）。

41 同右所収、明、鄭雲斎の序文、万暦二十五年（一五九七）。

42 同右所収、明、余象斗編、万暦二十七年（一五九九）。

43 同右所収、明、闕名撰、万暦三十八年（一六一〇）。

44 同右所収、明、徐筆洞纂、出版不明。

45 同右所収、明、劉雙松撰、万暦四十年（一六一二）。

46 若林喜助、明治16年（一八八三）、近代デジタルライブラリー http://kindai.ndl.go.jp/BIBibDetail.php

47 塚田為徳編、東京書肆、明治16年（一八八三）、近代デジタルライブラリー http://kindai.ndl.go.jp/BIBibDetail.php

48 鈴木千春氏「中国古代中世における逐月胎児説の変化 http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/students/03/suzuki.html」の表1にもとづき、縦書き用に書式を直した上で、比較する内容を大幅に増やした。また一部、改変し、必要と思われる箇所には注釈を施した。

49 …是謂始蔵の部分を付加した。

50 前掲『馬王堆古醫書考釋』七九一頁は「使」を「始」に作るが、注釈はない。

51 鈴木氏の表に「懐娠一月名曰」を付加した。以下同じ。

52 鈴木氏によれば、「始胚」は新雕にはない。

53 「名曰」がない。

54 このあと、経絡・針灸に関わる表現が以下のようにみえ、「胎」という語もみえる。夫婦人任身、十二経脈主胎養胎、当月不可針灸其脈也。不禁、皆為傷胎、復賊母也、不可不慎。宜依月図而避之。『胎産書』は経絡とは、ほとんど関わらないないため、『醫心方』の以下の部分に関しても同様に省略する。また、そのことは一々、注記しない。

55 『醫心方』には、以下の注がある。「太素經云、一月膏、二月脈、三月胞、四月胎、五月筋、六月骨、七月成、八月動、九月躁、十月生」とみえる。高文鋳等校注研究『醫心方』、四四一頁、注一四によれば、今本の『太素』になく、楊上善注の中にもない。また『素問』、『霊枢』にもみえない。おそらく丹波康頼が

引用した楊上善注の中にあったのではないかという。

56 「激」、高文鋳等校注研究『医心方』華夏出版社、一九九六、四四三頁、注二によれば、仁和寺本は「噉」で『諸病源候論』と同じ。「激」は「噉」の字形が誤ったのではないかとする。

57 鈴木氏の表は「成」に作る。

58 『馬王堆漢墓帛書肆』、文物出版社、一三五頁。

59 『大戴禮記』曾子天圓第五十八に「天圓而地方」、『淮南子』巻三天文訓に「天圓地方」とみえる。

60 馬繼興『馬王堆古醫書考釋』八二一頁、上が南。

61 禹蔵埋胞圖法、埋胞、避小時、大時所在、以産月、視數多者埋胞。

62 ここで使用した循環的時間、直線的時間という言葉は、リチャード・モリス著、荒井喬訳『時間の矢』、地人書館、一九八七、「第2章　循環的時間と直線的時間」で使用されている。

63 ただし、実際には10歳という年齢は全く登場しない。これは「死」に含まれているのかも知れない。つまり、「死」とは、生まれてから20代になるまでに落命する、つまり、10代後半までの寿命をいうのではないだろうか。

64 『中山王国文物展』。六博については、鈴木直美氏に精細な論考がある。

65 『支那民俗誌』刊行会、一九四二年。

66 同、二九七頁。

67 岩波文庫、永橋卓介訳『金枝篇』（一）、一九五一年、一〇八～一一一頁。

68 木下忠『埋甕：古代の出産習俗』、雄山閣出版、一九八一年、考古学選書18。

69 工藤元男「禹歩・天罡」、『「道教」の大事典』、新人物往来社、一九九六、一一二頁を参照。

70 『醫心方』巻二三、蔵胞衣料理法第十五所収。

71 吉村藤作、心友社、大正七年。

72 木村金吾、神宮館、昭和二十七年初版、五十八年十五刷。

73 聚寶樓、辛巳（二〇〇一）用のもの。